

置かれた場所で咲いて逝った姉との晩年の交流

# 「じゃあ、またね」

作・飯名碧水



マンションで一人暮らしの姉・美保を訪問し、小一時間、雑談をして帰る時刻になった。

「それじゃあ、またね」

弟の末男は、軽く頭を下げて、玄関を出た。

「ありがとう。またね」

曲がった腰をさらに低くして頭を下げた八十二歳の美保は、急いでドアの力ギを持ち、サ  
ンダルをつつかけた。

「丁寧な見送りは、いいよ。これから時々来るんだから……」

末男の遠慮する言葉をさえぎり、手を立てて小さく振った。

「運動になるから。歩かんと、足腰が弱るからね」

早口でつぶやき、美保は自室に力ギをかけ、先になって歩きだした。美保の部屋は二階の

一番奥にあった。

エレベーターのことは気にする様子もなく、手すりにつかまりながら、一步、一步、階段を降りた。

共用外玄関の歩幅の高い五段の階段も「よっころしよ」と気合をかけながら降りた。

「また来てね、……」などと言いながら、さらに五十メートルほどの小路をスタスタと四車線の幹線道路まで一緒にきた。

そこでまた「またね」を交わした。

少し歩いて末男が振り返ると、まだその場にとどまっただけで、美保は笑顔で両手を上にあげ、左右に大きく振った。また少し歩いて振り返ると、美保はまだそこにいた。

末男は、(そういうえば、田舎住いの農家の人は、客人に付いて出て、名残惜し気にずっと遠くなるまで見送るのが常だったな)と、子供のころを思い浮かべて苦笑した。

十三年間続いた姉・美保宅への弟・末男の訪問「じゃあ、またね」はこうして始まった。

六十八歳で勤めを退いた末男は、日課の一つに一時間ほど散歩することを決めた。その計画に、十日ごとに、片道歩いてちよつと三十分ほどの距離にある賃貸マンションに住む姉の美保宅を訪ねることを組み込んだ。

就業中は、近くに住んでいながら、多忙を理由にいつも「またお邪魔します」と言いながらごぶさたをしていた。

末男には（少しは役に立つこともあるかな）との思いがあつた。定期的に訪問することによって、美保の心身の衰え程度を判断し、これを美保の四人の子（末男のおい・めい）に伝える役割を果たそうとも考えたのであつた。

美保の子供たちは元気に育ち、皆ずっと以前に結婚し、五十代に入り、それぞれに子や孫がいる身になっていた。

美保は、六十代後半に体力の限界を悟り、田舎での農業をやめ、夫・健二と共に札幌市に移住し、気楽な暮らしに入っていた。七十五歳時にガンを患った夫を天国に送ってからは、二DKの賃貸マンションに移り、一人住まいを続けていた。

美保は、一人暮らしといっても、歩いて十分ほどの所に会社員の長男・勝信の家族が住む場所に住まいを選んでいった。頼れる存在が近くにあったのであるから、末男の思いはお節介にすぎなかったかもしれない。

面倒見のいい勝信夫婦が何かと様子見や用事代行で訪れていた。そして、毎週、曜日と時間を決めて、専業主婦の神戸市住まいの長女・多恵と、菓子店アルバイトの東京都住まいの次女・友美が別々に電話を入れる気配りもされていた。

一年に何回かは、自動車整備士をしている群馬県住まいの次男・義夫を含めた三人が適当に間を空けながら別々に来て、数日間滞在して住環境を整えて帰ることも実行されていた。

揃って温厚な人柄の四人きょうだいが連携して親孝行を遂行しているのを知って、（お見事、偉いなー）と末男は感心し、（自分の定期訪問は余計な気配りになるかな）との思いもち

よっぴりしていた。

三

(十日ごとに一度は頻繁になるかな)と、思いながらも訪問を続けていて間もなく、勇み足をやってしまった、逆に迷惑をかけてしまった。

というのは、予定した日になって、末男が午前中に訪問都合を聞く電話連絡を入れた時、美保は電話に出なかった。しばらくしての電話にも、午後になって念のため入れた二回の電話にも出なかった。何かあったのではないかと心配し、夕方になって近所住まいの長男・勝信に連絡し、美保の家に行ってくれるように頼んだ。

結果は、美保は元気で、午前は大家さんから借りた小さな畑で野菜の手入れをしていて、午後は買い物に出掛けていて、ちようど不在の時間帯と電話した時刻とが重なっただけだった。末男はとんだお騒がせをやってしまったのであった。

互いに携帯電話は持たず、固定電話を使っていたので、そんなことはよくあり得ることだった。以降、末男は大きさにならないように慎重に行動するよう肝に銘じた。

それでも、末男が思い直して「またね」を続けたのは、美保の喜ぶ歓迎の顔と、時折出会うマンションのオーナー夫人に、気軽に、「またおいでたの、偉いねー、お姉さん、喜ぶつしよ！」と、励まされるからであった。

夫人といっても、本業は農家のおばちゃんである。美保が畑を借りていたので、末男とはあいさつを交わす仲になっていた。

#### 四

姉と弟の歓談の話題はさまざまだったが、関心事は何と言っても住まいと暮らしのことである。末男がいろいろと聞いた話の中から拾い集めてみると、美保が独り住まいを選んだ理由は第一に、農家に嫁いだ当初、前に聞いていた話とは違い、夫の親夫婦と兄家族との三世

帯が一つ屋根の下で同居を強いられて味わった自らの屈従・忍耐の体験にあった。

美保自身の繊細な性格からして、たとえ広い家であっても世代の異なる者同士が和気あいあいと一緒に暮らすことはいかに難しいかを悟っていた。嫌な思いを重ねる負の連鎖を避け、お互いに我慢や遠慮を強くないで済む別暮らしがより賢明だと判断したという。

美保が末男にポロツともらし、「こんなしょうもない話、忘れにゃいかん」と途中でやめたいくつかの話題の中にも、同居のつらい回想がにじみ出ていた。末男が大人になってから、何かの話のついでに聞かされたような気がした内容も混ざっていた。

田舎育ちの美保が二十四歳で、さらに辺地の農家へ嫁入りし、嫁いだ次の日、同行して泊まった親代わりの叔父らが帰ろうとすると、「一緒に家に帰る」と言い出し困らせたそう。

一回の見合いと仲人話だけで決めた嫁ぎ先は、嫁いだその日から一時も気の抜けない雰囲気だったらしい。

末男はまだ十歳だったが、父が急病で死んで二か月後、末期ガンで入院中の母を安心させるために、美保は結納金だけで用意した嫁入り道具を持って嫁いだのだった。家は貧乏農家



の子沢山だった。夫は次男だから当然別居と思い込み、仲人さんに確認してもらっていたのに、初夜に「二年は三世帯同居で暮らすことになった」と聞かされた。

恐れおののいて一睡もできなかったから、叔父と一緒に実家に帰ると言い出したのであった。

そして、その二か月後、母の死で実家に来た際、今度は「松田家には戻りたくない」と言い出した。同行の夫・健二に頭を下げられ、諭されて、泣き泣き観念して帰ったという。その現実はあまりにも厳しかったらしい。

半年の間に両親に死なれた末っ子の末男は、そのあたりの時期の記憶がすっぽり抜けてしまって、両親の葬儀のこともあまり覚えていなかった。

奥歯に物が挟まったような話し方でチラチラと聞かされても、あまりわからなかったが、末男は美保の話は惨めで気の毒だったと思い、立ち入らず「ウン、ウン」と首を縦に振り続けた。

後になって末男は知ったのだが、美保にはそれ以外にも同居をためらう理由があった。実

は、長女・多恵、特にその夫・武志から何度も同居の誘いがあった。これには強く辞退した。知り合いもない神戸に移ることの不安に加えて、多恵の家族への負担を考えた。

多恵は、結婚して何年もしないうちに、寝たきりになったしゅうと（武志の父）の自宅介護に明け暮れた。二人の女の子を育てながらの生活だった。

その後にも、定年前の武志が脳梗塞で倒れて悪い、後遺症として半身マヒや言語障害が残り、ずっと介添えを要する状態になっていた。とても美保は、そんな家族と一緒に暮らす気にはなれなかった。

一方、長男・勝信の家族との同居は、ずっと後になって末男も合点がいったのだが、勝信の妻・洋子と美保とは、よくある嫁としゅうとめの関係にあり、気持ちの波長がうまく合っていないかった。

ふとしたことで、溝は深まってしまった。健二の葬儀の時だった。美保は落ち込んでいたのか他人への気配りで疲れていたのか、何人もの親族のいる所で些細なことを理由に洋子に小言を言った。

皆の前でプライドを傷つけられたことが尾を引いたのか、洋子は美保との同居の話には、首を横にししか振らなかつた。説得された時には、自分たちが住まいを構えたときに援助してもらった親からの資金を返すとまで言い出すほどかたくなになつたらしい。

そんなこともあつて、負い目のある長女婿の武志が、自分たちとの同居を美保に提案したのだつた。家族を持ち、本州が定住地となつている次男・義夫や次女・友美との同居話にも、美保はもう検討する気持ちにすらならなかつた。

あれやこれやで、美保は独居を貫いて人生を終える選択をせざるを得なかつた。もう子供たちとの同居の途は絶たれていた。いや、姉自らが割り切つて絶つたと後年になつて、末男はやつと理解できた。

長女・多恵が中心になつて、弟・勝信夫婦をたてながら、きょうだいの連携プレーでうまく母親を支え続けたことも、こうした経緯があつての結束だつたと考えれば、納得のいくものであつた。

訪問した時、末男との話の中で、ずっと美保は、長男の嫁・洋子をほめても、けなしたり

批判したりすることは決して言わなかった。

末男には、それがやはり不自然に思えた。洋子は夫婦一緒になければ、美保の所へ訪れていなかった点でも、嫁としゅうとめとの間は遠慮し構え合っている（一定の距離をとり緊張感をもって接し合っている）のではないかと末男は思っていたのだった。

そうは思っても、勝信の家族と和気あいあいと美保が年越しをしてきた話などを聞いてみると、末男は自分の気の回し過ぎかと思えたりもした。

## 五

美保は長年、腰を曲げての農作業に明け暮れた関係で、極端な前傾姿勢で歩く外見を気にして家にこもりがちだったし、すぐ車酔いをするので車に乗せてもらって外出するのも避けていた。常に胃と腸が圧迫され続けていた。

そのうえ、内気な性格で他人との交流も少なかった。鑑賞用植物の室内栽培と、畑作もし

ながら半農で暮らすオーナーさんからわずかな土地を借りての菜園耕作業で、日々の大半を過ごしていた。

押しつけの定期訪問なので、末男は負担をかけないように約束事を決めた。

必ず直前に電話して、在宅と都合を確かめたうえで訪問し、小一時間雑談をして帰るといふものである。

自分の心構えとして、聞き役に徹して、批判や論議をしないようにとも決めた。

末男は、長年の体験から、心を開き合うのは雑談、昔の話は佳境をもって終了、長居はやっぱり迷惑、「またねー」で「また近く会おう」を強調しておいとま、を心がけていた。

人付き合いの少ない姉・美保は格好のおしゃべりの機会として歓迎してくれたが、話の内容を軽率に他言しないという暗黙の約束も固く守ることにした。

末男が家に帰って家族にも気軽に漏らさなかったため、末男の妻・悦子は、お土産のお礼など、直接の美保との電話でのおしゃべりの中で、夫の訪問時の様子を知るといふ有様だった。

末男は、美保から野菜のほかにお菓子を土産に持たされることが時々あった。次女の友美が時折、アルバイト先で珍しい菓子を買い、母の元へ送り届けるように努めていた。

末男と美保とは十四歳も違い、間に五人のきょうだいが挟まれていた。一緒に遊んだり、仕事をしたりしたことがない間柄だった。

だが、会って話をしてみると、やはりきょうだい同士で、身内の安心感と共有の話題もあってすぐに打ち解け合えた。

まだ美保の頭はしっかりしていた。次のような考えを持ち、実行していた。

「物事には多くの面があり、真実も一つとは限らない」

「人の言い分は双方から聞いたうえでないと、判断は難しい」

「気を付けて言わないと、口は災いの元となる」

弟・末男にも一切をさらけ出すことなく、慎重な物言いをしていた。

そして、美保が語るいろいろな経験談は面白く、末男は教えられることが多かった。いつも、一時間は瞬く間に過ぎた。盛り上がって「ちょうど時間となりました、続きは次

回のお楽しみに」となり、大笑いになる場合が少なくなかった。

## 六

お互いの都合や体調不良等によって、訪問日時を前後に変更することはあっても、美保の元への末男の訪問はずっと続いた。

「姉弟水入らず」がいいと、末男の妻・悦子は同行することはほとんどなく、もっぱら電話のおしゃべりで義姉との付き合いを果たしていた。

そして、四年が経過した時、美保が早めの準備として見学もし、予約していた「ケアハウス望」にようやく空きが生じたので、そこに入居することになった。

美保の体力は年々衰えて、自立生活はそろそろ限界に達しようとしていたタイミングであった。

そのころ、姉弟の間でこんなやり取りがあった。

美保はケアハウスに入居のための準備を少しずつ始めていた。整理はなかなか思うように進まない、特に写真の整理がそうだと、末男に漏らしていた。

ある日、「母の写真を持っているかい」と、末男に問いかけた。（昭和の戦争時代、子沢山の末っ子として生まれ育った弟だから、母親の写真を持っているかもしれない。この際、ただ一枚の大切なものだけ譲ろう」と、美保は思ったのだった。

やはり、末男は、「持っているよ。肖像画を写真にしたものだけど」とは答えたものの、実の姿の写真は持っていないかった。

末男が見せられたのは、在りし日の母親のモンペ姿の小さなスナップ写真だった。

早速、それを借りて帰り、末男はパソコンに取り込んで拡大し、じつと見詰めた。心の奥底に押し込まれていた思い出がよみがえってきた。

ケアハウス入居の日がよいよ具体化したころ、姉・美保は、新鮮な野菜を末男にしばしば土産に渡していた家庭菜園をやめたのをはじめ、「ありがとう。またね！」の見送り場所が冬を越すごとに短くなっていた。



幹線道路から外玄関、二階の階段の降り口、二階通路の中央、内玄関の出口へと変化した。美保のお気に入りの場所は二階通路の中央で、そこでの見送りが最も長い期間となった。

この二階通路は東向きで外壁面がガラス張りであったので、内側からも外側からも見通しが抜群によかった。まるで皇居宮殿の「お立ち台」気分を味わえた。

美保は、「今日もお立ち台で」と言い、末男が外玄関を出てから幹線道路に出て姿が見えなくなるまで見送っていた。末男が時々振り返ると、そのつど手を振った。末男も手を高く挙げて応えた。

こうした「それじゃあ、またね！」の交流にも転換期が訪れた。

姉・美保は八十六歳時、故人の夫・健二をまつる仏壇を長男・勝信に託して、「ケアハウス望」へ入居した。

弟・末男は入居後も、当然のこととして定期訪問を続けることにした。

バスを利用しなければ行けない距離になったので、美保の遠慮を半分聞き入れて、訪問を二週間に一度に変えた。

末男はいつも、午前九時に家を出て、五分ほど歩いた所にある停留所で、頻繁に通る路線バスの上り線に乗車し、約二十分乗った後に施設の脇にあるバス停で降り、帰りは同じ下り線を利用して昼食前には帰宅する形で訪れていた。

美保の入居したケアハウスは、交通の便利な街中の主要幹線道路沿いにあり、通所施設も併設した五階建ての建物で、入居者の収入によって納める諸経費の金額が決まる公認の社会福祉施設だった。

美保の生活は年金の範囲内でなんとか過ごせる状態であった。

施設の玄関は出入りが自由で、履物をスリッパに替え、事務室窓口に置かれている「訪問者名簿」に訪問者・入居者名と入・退室の時刻を記入することになっていた。

バリアフリー化した建物の一階は玄関と事務室・面接室・物置・裏玄関で、二階と五階に

は共用の食堂・調理室・娯楽室・図書室・入浴施設・部外者宿泊部屋などが設けられおり、屋上は庭園と運動用スペースになっていた。

移動はエレベーター二台で昇降し、階段の使用は非常時しか認められなかった。

入居者の部屋は三階と四階にあった。廊下を挟んで、名札が掲げられた個室が並ぶ。広い廊下は屋内散歩もでき、中央には面会用・歓談用のくつろぎコーナーがあり、共用の洗濯機やトイレも設けられていた。

入居者は冷暖房が完備した専用個室で暮らし、在室の時は、入口に目隠しカーテンを下げ、開けっ放しにしている人が多かった。短時間でも留守にするときには、部屋の引き戸を閉め、カギを必ずかけるようにとの指導がなされていた。

毎日の起床や食事の時刻などのメリハリには、館内放送があり、美保はそれに合わせて生活を送っていた。食堂に向いてとる毎食の食事も、共同風呂での週三回の入浴も用意してもらえ、そのつど案内された。一日おきの室内掃除や、職員による一日二回の見守りの声掛けもしてもらえた。

生活面の拘束度は低く、外出なども好きなタイミングで行うことができ、自宅と同じような感覚で暮らせた。安心して毎日を気ままに過ごすことができ、美保は「楽ちんだ」と満足していた。

用意される食事は、高齢者向けにエネルギー量や栄養バランスなどが考えられた各種料理が提供されたので、粗食に慣れて、好き嫌いが無い美保は、少量に盛ってもらい、完食していた。

中にはおかずに不満を持ち、自分の好みのものをいつも持ち込む人が何人かいて、美保は末男に「やっぱり見苦しいよね」などと漏らすこともあった。

入居後の美保は、数年間はまだ体力も気力もあり、廊下の散歩や屋上庭園の手入れ、朝の体操、小物制作の集まり、映画会・音楽会・講話など、退屈させないように組み込まれた諸行事にも参加できていた。

行動の制限を受けることなく、外出して、近くの散歩や買い物にも出かけていたが、施設主催の、車で出かける花見や買い物ツアーなどには、車酔いを避けて参加していなかった。

末男と美保は三階の個室内で面会した。共用スリッパを室内用に履き替えた後、廊下に置くことで「来客中」を示す慣例になっていた。

一人用の個室は、八畳間ほどのフローリングのスペースのほかに車椅子対応の洗面所・トイレと物入れが付いていて、小さな調理台も湯沸かしも備えられていた。

美保は、空間の端にベッドを置き、片方の壁にテレビ、物入れ棚（その上に固定電話）、冷蔵庫などを並べ、中央に小さなテーブルと椅子を置いていた。

幅一メートルほどの出窓に小さな花鉢をいくつも並べ、また、床に大きな鉢を並べサボテンなどを育てていた。美保の趣味は、屋上庭園や室内で花を育てることであった。

末男が訪問した時、まずお互いに確認し合うのは、「みんな、元気だったかい？」と本人と家族や子供・孫たちの健康状態のことだった。

その後の会話では、いつも日々発生する事故・事件・天候・政治・経済など、とりとめもない世間話をしていた。

集団生活では、身近に暮らす人の付き合い方や過去の経歴、そのつわさ話や見苦しい言動に関心が向きやすい。

だが、美保は、部屋を行き来するよつな間柄の人を作らず、誰にもあいさつだけは笑顔でするようにし、誰ともほどよい距離を保つように心がけていた。

末男に、意地悪をされた話や、噂話の受け売りや、他人・施設に対する非難・批判を聞かすことなどは、ほとんどなかった。

美保は、人生は様々、百人百様の生き方・考え方があつたと割り切り、自分は自分とあつさりしていた。身内のことや過去の出来事をくどくどと愚痴することもなかった。

気遣いを増やさないように、やはり末男は滞在時間を守つた。あつという間に経過して、末男が帰り支度を始めると、美保は時間を惜しんで早口になり、「また今度」となる。

最初のころの見送りは、美保も新聞取りを兼ねて部屋を一緒に出て、エレベーターで玄関

まで降りていた。

受付の「訪問者名簿」に退室時刻を記入して、そばに備えられているカレンダーで「次は〇〇日」と、次回の来訪日を確認し合う。

末男は手を上げ、「それじゃあ、またね！」と玄関を出る。

美保は「ありがとう。またね！」と手を振る。

## 九

弟・末男も同様だが、姉・美保は徐々に衰えが進行し、食が細くなり、諸行事への参加もおっくうになり、部屋で読書、テレビ、塗り絵、パズルなどをして、のんびり一人で過ごす時間が増えていった。

「訪問開始から数えると十年をこえ、美保が九十三歳を迎えたころには、末男に次のように言って笑っていた。

「通って来てくれてもう十年以上になったね。何を話したんだろう。よくも尽きないで、たわいない話が次々とあるね。きつと同じ話ばかり繰り返してきたんだね、ハハハ……」

「弱ってきたから要支援認定ぐらいしてもらいたいと相談しても、ケアマネジャーは笑って相手にしてくれないんだよ」

美保は、まだ眼鏡も補聴器も不要で、記憶も理解もしっかりしていた。「ぴんぴん長生き、ころりと往生」を意味する口癖の「ぴんぴんコロリ」論も健在だった。一方、

「歳が歳だから、どこかが悪くて当然。足元が心もなくなっているので、出歩くことがぐんと少なくなった」

「車酔いをするので遠くへは行けないし、手に震えが出てきたし、食欲が落ちて通じがよくなくてお腹痛みもするようになった。長男・勝信の家での年越しももうやめる」

「そうかと言って、入院して苦痛な治療は受けたくないし、延命措置もごめんだ。十分に生かされてきた。いっお迎えがきても、未練なしだ」

などと、弱音とも覚悟ともとれる言葉を漏らした。そして、病院嫌いの美保は、



「お腹の調子は今一だけれど、まだまだ診てもらいに病院に行く気はない」と付け加えていた。これには、末男の妻・悦子から「馬油をへソに塗るのが便秘にいい」とプレゼントされたこともあった。

そんなこんなで、「じゃあ、またね」は、美保の身体の老衰化と認知症の進行程度を、末男が美保の子供たちにあえて言うこともないまま過ぎてきた。

「それじゃあ、またね」と「ありがとう。またね」の繰り返しは、二人にとって希望の約束になったようにも思われた。帰りのバスで、ふと（このままスイスイと百歳まで生きちゃうかも。それなら、オレも元気だってことだ。そうなったら大いなる奇跡だ。とうていあり得ないだろうな……）と、末男はつぶやいていた。

次に末男が訪れる直前だった。末男に勝信から電話があり、「いよいよ食欲がなくなり、便秘が長引き腹痛に耐え切れなくなって、母はとうとう近くの病院に入院した」との連絡が入った。

腸閉塞とわかって、駆けつけた子供たちが見守る中で、直ちに患部を取り除く手術が行わ

れた。手術後は、長女・多恵と次女・友美が交代で来て、施設の美保の部屋で寝泊りしながら病院に出向き、面会時間を利用して付き添った。

手術後は順調に回復し、美保は二十日ほどしてまたケアハウスに戻った。施設職員の手厚い介護と見守りを受けているうちに体力が戻り、退院して二か月後には、以前に近い状態にまで回復した。

続いていた末男の訪問に対しても、久々にエレベーターの前まで出向いて、美保は「ありがとう。またね」と何度も手を振る見送りもした。その日は末男も、久し振りに「いつもに戻った」と、ニコニコ顔して玄関を出た。

十

このころになって、訪問時、末男は美保の体調のサインを見落としていたことに気づいた。「またね」の場所がだいぶ前に、「玄関」から三階の「エレベーターの前」へ、その後「部屋

の入口」へ、さらに「部屋で椅子に座ったまま」へと変化していたのだった。このことに、やっと気づいたのである。美保は弱音を吐かないほうなので、美保が「エレベーターの前」で見送れないことは、もはや体調が普通でないというサインだった。

末男は思い付いた。バランス能力の低下で、足がもつれて転ぶのが最も怖い。固定電話だから、気持ちを急かさないことが肝心。そこで約束事を一つ加えた。出かける前に家で電話して都合を聞く時、予告コールを二回鳴らしていったん切り、一分後にまた電話を入れることにした。(以前に、娘たちが電話をくれる時には、こうしていると、美保から聞かされていたのを思い出して、末男はやっと自分も実行に移したただけだったが……)

このケアハウスは本来、介護を必要とする人は入居させない前提の施設であったが、長期間の入居に伴う高齢化で、おのずと要介護者の面倒も見ざるを得なくなっていた。介護士が常駐するようになった。退院後の美保も、介護認定を受け、散歩や用足しや入浴の際には、ボタンでコールすると介護職員が駆けつける形の介添えを受けた。

ここで、羞恥心の強い美保に悩みが一つ加わった。男性介護士から体に触れる介添えを受

けると、美保は「ザワツとする」ことがあるからだ。今や当たり前だから、美保は、わがママを言えず、その嫌な思いをずっと引きずっていた。美保は末男に、「こんど入院したら、ここには戻らん」と打ち明けた。慣れ親しんだ施設でも戻らない気持ちを強めていた。

十一

最初の入院から二年余が経過し、美保は九十五歳になり、秋を迎えたころだった。美保は、また胃腸の状態が思わしくなり、前と同じ「恵徳会病院」へ入院することになった。

前回と同様に、長女・多恵と次女・友美が交代で来て、施設の美保の部屋などで寝泊りしながら病院に出向き、面会時間にと付き添った。

今度は体力がぐんと落ちていて、年齢的にも手術は困難かもしれないとの医師の見立てがあった。美保自身も手術を強く嫌った。以前から意思表示がなされていたので、子供たちの

考えも無理強いしない方向で一致していた。苦しむ手術や機器を使った積極的な延命医療を行わない方針が関係者の了解のもとで決まった。

それでも、美保には、末男に「とうとうねんねんコロリになっちゃった」と語りかける元気はまだ残っていた。

弟・末男は、姉・美保の疾患に思いを深めた。（胃腸のガンなのではないか、それも転移しているのではないか、二年前の手術も実はガンで、今度はその再発だったのではないか）と  
思い始めた。

というのは、母親をはじめ、兄に一人、姉に二人が、胃腸系統のガンで死亡していたからである。美保も末男も、ガンに変異しやすい遺伝子が受け継がれている家系ではないかとの  
思いを以前から持っていた。時々、そんな思いの話題が、訪問時の二人の会話にも上つてい  
た。

「知らない間に進行している場合があるというから怖いよね」と、美保はいつも自分に言い  
聞かすようにつぶやいていた。

大病院なので、手術をしないで経過をみるだけと決まれば、長期の入院は認められない。待機者が何人もいるとの話も聞かされていた。

入院一か月を過ぎると、美保はなるべく早く他へ移ってほしいと退院を求められた。

すでに美保には、覚悟もできていて、もう治って戻ることはないとの見通しで臨んでいた。自ら話すことは終活に関することばかりになった。

「様子をみながら考えよう……」と諭す息子・娘に、次々と指示を出し、日ごとに繰り返し、進み具合を確かめ、早めるように催促した。

再入院した直後には、施設の家具等を処分し、九年もお世話になったケアハウスを退去して退路を絶った。

そして、退院後の行先を経営が同じ系列の特別養護老人ホーム「白百合園」にし、必要ならそのそばの「神聖病院」に入院と、先々の行先を決めて、長男・勝信に手配させた。

多角経営のキリスト系医療法人は、利用者の状態や程度に応じて受け入れる体制を整え、いくつも施設・病院を経営していた。親切・丁寧で知られており、最期を託する施設と病院

は着取りの場としても広く知られていた。

十二

こんなこともあった。姉・美保は、毎年素晴らしい花を咲かせて、部屋を訪れる人を感心させていた白い胡蝶蘭を弟・末男に預けたいと言いつ出した。

帰途を追って出てきた廊下での長女・多恵からの話で、「弟・勝信が車で家へ届けるから」との申し出だった。

歩きながら小声で聞いた末男は（あれだけ大切に育てていた花だけに、花育ての経験豊富な人に託すべき）と速断し、こればかりは請け負えないと、その場で辞退した。

末男夫婦には以前、姉から立派なサボテンなどをいくつももらっていたが、三年と花を続けて咲かせられず、結局、越冬や水やり・追肥に失敗し、枯らせた苦い経験しかなかった。美保に申し訳なくて、枯らせた花の報告をしていなかった。不得手なことを引き受けても、

すぐに枯らせて、がっかりさせてしまうに違いないと、とつさに判断したからだだった。

だが、このことを末男は、後になって喜んで受け入れるべきだったと後悔した。

補聴器を付けた耳で「預けたい」と聞こえたのが違っていて、実際は「あげたい」と言われたのだっただけなら、確かに、預けるだけなら、勝信に頼めば済むことだった。

美保が終活で整理する一環であり、お礼の気持ちを含めて弟・末男に形見として渡したかったのだった。末男は、聞き直して確かめたり、機転を利かさなかつたりしたことを後で悔やんだ。

### 十三

そうこうしていた美保の再入院中も、この後、いったん退院し入居した数日の「白百合園」でも、約二か月に及んだ「神聖病院」でも、頻繁に勝信夫婦の様子を見に通い、本州に住む多恵と友美は少し間を置きながら交代で来て、複数日間ホテルに滞在して病院に出向き、許



される面会時間の間だけ付き添った。

末男たち夫婦も、移った施設と病院が自宅から比較的近い所にあり、病院の無料送迎バスが毎日何回か定時に走行していたので、これを利用して見舞っていた。専用バスに乗って行けば、十分とかならない市街地の端に位置する病院と施設だった。

街外れの森林中の崖状土地の上側に神聖病院、下側に白百合園があった。

施設に移るころには、美保の体力も気力もどんどん落ちてしまい、寝たきりで、毎日の三食も他の物も少し食べるかほとんど食べないかの状態になっていた。

いったん白百合園へ入居したものの、対処するすがほとんどなかった。医療措置は施さない施設での日々は、腹部の痛みを抱えたまま、ただ苦しみに耐えて寝ているだけなので、平穩に自然死を迎える状態にはまだ至っていなかった。

心肺・意識の余力が残っている美保本人も、取り巻く他の人も、毎日が長く、落ち着かない状況にあった。

病院で、痛み止めを入れた点滴を受けながら一日の大半を眠って過ごす途がまだ残されて

いるとの判断で、早々に神聖病院へ移され、点滴による低カロリー栄養と水分の補給を主に  
して、余命を過ごすことになった。

姉・美保の入院した病室は、主要建物から廊下でつながる離れた奥の三階建ての別棟にあ  
った。西と北は森林、東は崖で静寂に包まれた環境にあった。

廊下を挟んで両側に並ぶ三階の十二の病室では、人の気配がするのは半分にも満たなかつ  
た。弟・末男にとって、半月ぐらいの間、奥の一室で絶えずうなり声をあげる一人の男性が  
いたのが印象的だった。

午前九時半ごろに行っていたのだが、末男がいつ見舞っても、同じ四人部屋に二、三人が  
入院していた。美保と同様な状態の患者ばかりで、どんな理由か、入れ替わりはけっこうあ  
った。

どのベッドも手付かずの食事が脇に置かれたままで、異様な静けさにあつた。呼吸困難に  
伴う荒い呼吸やたんの排出困難でせき込む様子がほとんど見られないのも意外な気がした。

点滴を外され、まばたきもせず、天井を見詰めたまま息だけは自力でする人もいた。時た

ま、点滴の状態や寝姿を見回る看護師の出入りがある程度で、スリッパの音を立てるのものはかるほど静かであった。

#### 十四

高齢者の終末期に行く点滴は、苦痛を取り除く方法がほかにはないからだとされる。そして、最大の理由は病院に入院していながら、何も医療行為を行わないことに患者もその家族も納得しないからだとか。続ける点滴は気休めの延命措置にすぎなかった。

美保は、体力も気力もさらに落ち続け、面会者が訪れると、調子が良い場合でもせいぜい一言、二言を弱々しく話す程度になった。そして、時々目を開けてうつろに見回すこともあったが、眠ったり目を閉じたままだったりで、やせ衰えていく状態が続いていた。

笑顔の表情も弱くなり、末男への「ありがとう。またね」も、言葉にならなく、弱々しく微笑むか、うなずくだけになって久しく日時が過ぎた。

末男は椅子に座って美保の顔を見たり、窓辺から崖下に広がる住宅街を見下ろしたりして時間をつぶし、次に出るバスの時刻を見計らい、美保に手を振り、患者の人たちにそつと頭を下げて帰る日が続いた。

## 十五

弟・末男は、姉・美保が神聖病院に入院して間もなくから少し心配をし始めた。季節を間違えたり、末男が在職中だとの見間違いがあったりして、美保の現状認識はどんどんずれていった。

末男の妻・悦子が見舞った時、「帰るときに着る洋服だけしか持ち物はなくなつた」と、スリッケースを指さしてさびしげに笑つた、とも聞いていた。

想像以上に長く生き延びる状態になって、日に日に末男のその心配な思いは強まつた。

よくある例で、姉も例外ではなかつたと思つたのは、抑制が効かなくなるといふか、子供

に帰るといふか、もうろうとしてきて、帰る自分の家はもうないのに、突如「家に帰りたい（帰る）」とわがままを言い出すのではないかと思つたのであつた。

突然に言い出されては、子供たちは対応に困り、うろたえるだろう。心構えだけは準備しておいた方がよい。そう思つた。

約十三年間訪問した叔父の末男の役割として、おい・めいに伝えるのはほんの小さなことかもしれないが、「今」で「これ」だと思えてきた。

帰りたいたいという要望をむげに拒絶・説得するのはあとで後ろめたい悔いが残るし、かといつて、たとえ二、三日でも外へ連れ出すのは、大変な負担・影響を周囲にもたらす。

最期を家で看取るとなると、大変なことになる。遠い昔のことだったが、美保と末男の母の場合がそのいい例だつた。

末男は、長女・多恵と長男・勝信が同時に会える機会をねらつて時間をとってもらい、悦子と共に四人で、多恵が宿泊しているホテルで会い、気がかりに思つていることを率直に伝えた。

末男は、考えつく対応例もいくつかあげ、いつ言い出されてもあたふたしない対応を事前に考え備えておくよう助言した。

四人のきょうだいの中でも、摩擦を避けて長男らしく振舞ってきた勝信は、引き取ることが実際に起こると思ったのか、涙ぐんで吐き出すように言った。

「母さんには、長い間、洋子だつて気遣いをして、あんなに尽くしてきたのに、……」  
大きくうなずいて、末男はゆっくりと付け加えた。

「長い間には、親と子、嫁としようめ、いろいろあるのが当たり前。ない方が珍しい。今はそれを置いといて、仮定で想像される例を言ってみただけ、旅立ち際には誰もがわがままを言い出すと覚悟して、前もって温かい対処法を考えておく。これは、取り越し苦労に終わることを願ってやることだと思ふよ」

叔父として末男は、おい・めいに思いを伝えたのだった。

他人事ではない、やがて自分にも訪れる親の側の思いを想像してみた。もうろう状態の夢は、いつも自分の帰り先を探してあれこれ迷うだろう。さんざん迷ったあげく、結果、いつも行き着くのは、住み慣れた我が家か子供が住む家かであろう。

近年になって多いパターンとしてやる対応だが、親にとつてはわずかな望みの保険、子供にとつてはその時だけの口実で、子供の住宅取得の時に生前贈与が早々と行われることである。親の終末期の居場所になる部屋（仏壇を置く部屋）の確保という名目の口約束で、親がいかにも多額の資金を子供に与えてしまつか。親が晩年につぶやく後悔の典型だろう。

加えて、次のパターンで、悲哀を味わうのは息子の方の親が圧倒的に多い。結婚して息子が迎えた妻もまた、自分の親の老後を主になって心配しなければならぬ場合である。

実質的に実権を握るようになる息子の妻は、自分の親の方に多く関心が向き、自分の親の面倒見を優先するようになる。孫と祖父母の結び付きも母方と親密になりがちなことも関係する。

別居していた親が介護を必要とする状態になった場合、引き取って事がスムーズに進むのは妻の親の方だといえる。実際に介護するのはほとんどが息子の妻だからである。

割を食って、愚痴をこぼすのは息子の親である。

美保の場合にも似た状況が生じていたことを匂わせる話を、末男にポロツと漏らしたことが以前にあった。洋子の母親を一時期引き取って勝信の家で面倒を見ていたらしい、とつぶやいた。

「私が元気なんだから、それはそれでいいんだけど、……」と言う美保の目はうつろだったと、末男は覚えている。

いくら同居しないで最期を迎えると強がりを買っていて、ふと思う一抹のわびしさから、わがままをひとこと言ってみたい気になってもおかしくはない。

さまよう終末期の姉・美保の夢は、何度見ても、ほとけ（夫・健二）をまつる仏壇のある部屋にたどり着く。確かに息子夫婦の家ではあるが、以前から資金を出して用意しておいた自分が帰る当然の家でもあると思えてくる。決して無理でも不自然でもない。



スーツケースに洋服を入れて残してあるのを気にするのがその証拠で、わずかでも望みは捨てていないと、末男は判断した。

きつと美保が「家に帰る」と言い出すに違いない、との思いが強まったのである。

## 十七

美保には、しばらくはそんなことを言い出す素振りが見られなかった。

末男は余計な心配にすぎなかったかと思っていた。だが、終末期になってやはり実際に起こった。息を引き取る二日ほど前だった。

美保に多恵が付き添っている所に、勝信夫婦がやってきた。その時だった。偶然に浅い睡眠から覚めたのか、一瞬すっかり意識が戻ったのか、念願の帰宅の時が来たと思っただけ、目を見開いた美保は、「すぐに洋服に着替える」と言い出した。間を置かず、洋子が美保に静かに問いかけた。

「おかあ（義母）さん、家に帰ったら私が下（しも）のお世話をするようになりますが、私でもいいのですね、……」

「……………」

皆の見詰める中、美保は黙ったまま目をつぶった。じつと皆は見守った。そのまま美保は静かに深い眠りに就いた。そして、何事もなかったように、その場は収まったという。すぐ後で多恵から末男に報告があった。

叔父から心配を聞かされた勝信は、すぐに妻・洋子と相談し、母が家に帰ると言い出した時の対応を練ったという。

「見事に丸く収まったことを知り、末男はほっとした。そして、受け入れ、一緒に暮らす姿勢を示し対応してくれた洋子に感謝した。」と同時に、夫の命日に手を合わせていた仏壇の前まで行けなかった姉の無念も察した。

もし以前のわだかまりが尾を引いていたとしたら、嫁がしたてに出た温かい一言で、もやもやは一瞬にして消え去り、美保は打ち解けた気分であらかな気持ちになり、相手の立場や

気持ちになれたに違いない。

いずれにせよ、末男は（姉は家族との別れの対話の機会をきちんと持てた。よかった）と安心した。

十八

美保が見る夢は、地上でさまよいのをやめ、天国への途に向いたのであろう。一日眠り続け、付き添いが長女・多恵から次女・友美に替わってしばらくしたところで、付けられていた機器のバイタルサインがカウントダウンへ変化したらしく、相部屋に居た美保はただちに離れた場所の個室へ移された。

珍しく雪のない年の十二月十一日の夜だった。友美から連絡を受けた勝信は、すでに航空機に乗ってしまった多恵への連絡はあきらめ、末男夫妻にも看取りに加わってもらった方がよいと判断し、末男宅に電話を入れた。

末男たち夫婦が駆けつけた時には、次女・友美と長男・勝信夫婦とその長男の四人がそばに付き添い、顔全体を覆う酸素マスクを付けてまだ不規則な息をしている美保に代わる代わる声掛けをしていた。

物々しい画面表示のモニターがそばにあり、いくつもの波や数字が示され、刻々と変化していた。

皆で声掛けをし、モニターを見ていると、看護師が来て、眼を見開き、懐中電灯でどうこの状態を確認した。看護師たちの詰め所でも、無線で患者の状態の変化は確認できているようであった。

また、少しの間があつて、突然、酸素マスクの中で大きな音がした。

「ガポーツ、ガボ、ガボ」

皆への「ありがとう。さようなら」の内なる声だった。一瞬、顔が恥じらいのほほ笑みになった。

友美が涙声を高め「お母さん」と呼んだ。見つめる皆の顔からポロポロと涙がこぼれ落ち

た。末男も、最後の「ありがとう。またね！」を聴いた気がした。期せずして皆からも「ありがとう」の言葉が美保に向けられた。

次の瞬間、モニターは一切の動きが鈍くなり、各測定値はゼロになり、各波形は平坦になった。赤いランプが点灯し、アラーム音が大きく鳴って、また静かになった。

看護師二人を伴って、若い男性の当直医が走り込んできた。

「午後十一時一分、ご臨終です」

死亡確認を済ませた医師は、時計を見ながらそう言って、弔意の頭を下げた。そして、一呼吸置いて、慰めの言葉を付け加えた。

「天寿を全うされ、安らかに眠りに就かれました。とてもいい看取りができましたね。こんなに多くのご家族に見守られながら旅立ちができるのは珍しいんですよ」

末男は、叔父として、また母親としての姉・美保に代わって、付け加えた。

「みんな、本当によく尽くしてくれたね。ありがとう」

※ ※ ※

十二年八月に及んだ姉と弟の交流 “じゃあ、またね！” に終止符が打たれた。  
その時、美保は九十五歳、末男は八十一歳であった。



(完)

## 奥付・付記

〔書名〕 「じゃあ、またね」（実話小説）

〔発行〕 二〇二四（令和六）年十月七日 （米寿記念出版）

〔著作〕 飯名碧水（いいな・へきすい、本名Ⅱ白佐俊憲、文筆家）

〔監修・発行〕 正倉一文（まさくら・いちぶん、随筆春秋事務局長、文筆家）

〔発行元〕 随筆春秋ポータル

〔印刷委託先〕 製本直送ドットコム

〔出版〕 電子出版（無料閲覧・ダウンロード可能、希望者へ有料印刷可能）

〔収録先〕 ・ 国立国会図書館デジタルコレクション及び同サーチ

・ 随筆春秋ポータル「飯名碧水の部屋」、ほか

